



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

若き等が俵引き合ふわが町の初市吹雪けばテレビにて見る

目黒 富子

孫子らの帰りし後は風船の温き空気が抜けゆく如し

吉津 政枝

家を空け子ら住む街で暮す友賀状で生家に思ひ馳せをり

皆川 恒子

電話機のベル鳴り続き焦れども強張る如く体動かず

五十嵐英子

月例に出せるわが歌採られしと姪は施設に持ち来てくれぬ

五十嵐夏美

凍てし朝新聞抱ふる知恵遅き子に滑るなを繰り返し言ふ

渡部ゆき子

雪落つる音を聞きつつ臥所にて茅葺き屋根の頃を思ひぬ

馬場 八智

体力は気力だけでは補へず八十路の我に大雪厳し

齊藤ちひろ

手をとりにて共に歩みし夫婦道六十年はただ夢のごと

渡部ヨリ子

老眼鏡かけてパソコンに向ふ我自筆の手紙の漢字浮かばず

新国 洋子

正月に作りしあられの餅揚げて施設の姉の面会にゆく

只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

一 灯

二階よりギター聞こえて冬休
武勇伝一気読みして春炬燵

恒 夫

雪搔くや笛吹き薬缶鳴りやまず
妻に躓き坂ゆつくりと冬の月

又 壺 歩

新聞のとどかぬ朝の猛吹雪
櫛形の月真白に寒の朝

邦 男

お供えの影に隠れて嫁が君
太陽の光はじきて除雪道

吉 児

曾孫の写真見つつ声聞く初笑
竹折れる静けき音や夜半の雪

隆 堂

チャイム鳴り朝日まぶしき深雪晴
閃光やしぶき氷を研ぎすます

邦 夫

布団干すことも自愛の一つとし
灯至夫逝き未曾有の雪の深さなり

笑 羊

四日はや水音立てて活魚店
ミシン踏む男子生徒や室の花

康 女

覚えきし御慶を述べる幼かな
秒針のカチツと年の改まる

礼

我を忘れ一時見入るどんどの火
豪雪の只見や今日も降りつづく

都

乳飲み児の泣き声高く年明け
我を案じメールのとどく寒夜かな

一 穂

貯蔵庫の野菜小出しに冬真中
厄流し来て餅花に迎えらる

洋 子

リウコ

玄関に声やいつしか小雪にて
便りなく電話も鳴らず冬満月

敦 子

雪激し分教場の歌留多取り
深雪晴窓の向こうにじょうびたき

郁 子

月光の降る曲屋の大氷柱
冬日入る人影を見ぬ寺の庭

修 一

朝の気の張りつめており壺の梅
開け閉ての襖に匂う壺の梅

大 寒

大寒や今朝も六時の寺の鐘
区会終え爛酒高く乾杯す

礼